

人類と利き手～江戸時代人女性における右手優位性～

〈卒論要旨〉

現代人は、二本ある手のうち場面に応じて片方を選択し利用している。この選択は、ほとんどの場合、意識することなく実行されている。ごく当たり前の行動・動作であるが、この動きは猿人から現代人に至るまでの人類の進化和大いに関係している。何故ならば、利き手はヒト (*Hominidae*: ヒト科) に特徴的なものであり、他の動物とヒトとを明確に区別するものだからである。

では、何故、手を使用する際同じ側の手を使うのだろうか。両手利きではなく、一方の手が利き手 (獨立して使用する手) になることに適応的理由があるとしても、何故それが狂乱的に右手になるのか。このような問いに人類生物学の世界でも関心が集まり、いくつかの仮説がよせられている。だが、その殆どが理論的・解剖学的アプローチによるものになっている。人間の身体の働きは脳によって支配されているため、身体で起こる左右差扱った研究が脳こそその原因・理由を求めることに異存がない。しかし、生得的な左右差がその成長に応じて変化していくことはよく知られていることであり、欧米と比べ日本など右利きへの拘束が強い文化だと指摘されてきた。

本論文では、比較的人骨資料がまとまって存在し、文献資料も豊富にあり江戸時代も注目し、日本における利き手の存在とその要因を捉えて、おもに人類学的観点からその背後にある文化的規制等を探ることを目的とした。

増上寺子澤洋A・B地区出土人骨を用いて、上腕骨 (最大長、中央周、中央黄径、頭最大黄径、頭最大矢状径、滑車頭頭幅、桡骨 (最大長、骨体中央周、骨体黄径)、手関節面幅、尺骨 (最大長、骨体中央周、骨体黄径、尺骨矢状径) を計測した。その結果、女骨においては14項目中8項目において有意差が認められたのに対し、男骨では14項目中3項目にしか有意差が認められず、子供骨については14項目中1項目にしか有意差が認められなかった。

これらのことは、利き手の右への傾きに遺伝的要因だけでなく、社会的要素も大きく加わっていることを明らかにしている。江戸期武家階級においては、特に後者の要素が女骨に与えた影響が決して少ないものではなかったことが分かった。

今回、採集した子供のサンプル数が不安が残った。数が少ないと測定部位に破損が認められるものが多く、満足なデータが得られなかった。将来的に子供の人骨のデータが得られれば、子供から成人に至るまでの利き手を取り巻く社会的圧力や、ひいては利き手だけでなく当時の文化・世帯を考察する一手段になると思われる。今後江戸以前と明治以後のデータが得られれば、日本における利き手の変遷がより大きなスパンでとらえられるだろう。

〈卒論目次〉

- I. はじめに
- II. 生物のラテラリティ

- III 左右差と利き手
- IV. 先行研究
- V. 分析対象および分析方法
- VI 結果および考察
- VII まとめ

〈主要文献〉

*参考文献

- Deacon, T. 1988 *The symbolic species: The coevolution of language and the brain* Penguin London
- 江藤寛台 1981 『人類学講座 別巻一「人体解剖学」 雄山閣
- 江原昭彦 1987 『人間の起原と進化』 日本放送出版協会
- 遠藤秀記 2006 『人体 失敬の進化史』 光文社
- 服部理明 1996 『ヒトのかたちと運動』 大修館書店
- Young, G., Segalowitz, S. J., Carter, M. C., and Trehub, S. E. 1983 *Manual specialization and the developing brain* Academic Press New York
- 平沢一郎 1979 「日本人の直立能力について」 *人類学雑誌* 87:81-92
- 平沢一郎 1993 「日本人の立ち構え」 『日本人の生理』 朝倉書店
- 平本嘉助 1993 「日本人上腕骨、橈骨、尺骨の長さの左右差」 *Anthropological Science* 101:473-481
- 石川松太郎 1977 『女大学集』 平凡社
- 井原西鶴 1686 『本朝二十不孝 決定版 文館西鶴全集十』 明台書院
- 井原西鶴 1694 『西鶴雜留 決定版 文館西鶴全集 十四』 明台書院
- 人類学講座編集委員会編 1981 『人類学講座 9 適応』 雄山閣出版
- ジョリー・A、矢野喜夫、菅原和孝訳 1982 『ヒトの行動の起原』 ミネルヴァ書房
- 木村邦彦、服部理明 「剣道練習者上下肢関節の関節析出について」 *東京教育大学体育学部紀要* 6:35-39 1996
- 久保田競 1982 『手と脳』 紀伊国屋書店
- 久保田競 1991 「ニホンザル嵐山R群における好みの手」 *発達* 21:30
- 久保田競編 1991 『左右差の起原と脳』 朝倉書店
- 香原志勢 1975 『人類学物理学入門』 中央公論社
- Mark L. Latash, Michael T. Turvey 1996 *Dexterity and its development* L. Erlbaum Associates Mahwah, NJ
- クリス・マクマナス 2006 『関節析の起原』 講談社

南博, 社会心理研究編 1983 『日本人の生活文化事典』 勁草書房

西田利貞 1983 『道具の起源』 現代のエスプリ別冊 至文堂

坂上和弘 1999 『縄文具家人男性の第一中手骨における左右差』 *Anthropological Science* 107 : 21-30

島泰三 2003 『新書まなびたいのか』 中公新書

Tomasello, M., A. Kruger, and H. Ratner 1993 Cultural learning. *The Behavioral and Brain Sciences* 16:495-552

富田守 1967 『猿の四肢運動様式における研究 (1、2)』 *人類学雑誌* 75 : 120-146, 173-194

富田守 1994 『ホミニゼーション (ヒト化) の総合的考察』 *生活文化研究* 1 : 30-39

富田守, 真家泰生 1999 『生理人類学 第2版』 朝倉書店

Isabelle Villemeur 1994 *La MAIN DES NEANDERTALIENES* CNRS EDITION Paris

Valander—Sidiis, D 2004 When only the right hemisphere is left. *Studies in language and communication*

Brain and Language 91 :

199-211

フランク・ウィルソン 2005 『手の500万年史』 新評論

山田英知 (監訳) 1989 『図解 解剖学事典 第2版』 医学書院

*雑誌・新聞記事

1891 『左尊く右卑しの説』 *東京學士會雑誌* 第13巻第5号

1900 『右利きと左利き』 *東京學士會雑誌* 第22巻第6号

1898 『寶叢百話 第七十六 左利 説』 *太陽* 第4巻第14号

1898 『寶叢百話 第七十七 左利 説』 *太陽* 第4巻第15号

1899 『皇国左右尊卑の説』 *女鑑* 第181号

1887 『左右手不均衡の原因』 *哲学會雑誌* 第1巻第5号

1890 『左きき』 *天則* 第3巻第6号

読売新聞

1882 (明治十五) 『公開 12.22 東京・朝刊』

1914 (大正三) 『身の上相談 左利きを治したい』 06.13 東京・朝刊

1920 (大正九) 『家庭衛生顧問 左利き遺傳するか』 11.12 東京・朝刊

毎日新聞

1913 (大正二) 『左利の研究』 07.06 大阪・朝刊

1920 (大正九) 『偉人講義の左半身が発達す』 07.25 大阪・朝刊

*発掘報告書

『増上寺院群 光淨院・貞徳院、源興院』 1988 港区教育委員会